



戦争遺跡を活かした「館山まると博物館」

NPO 法人安房文化遺産フォーラム 共同代表 池田恵美子

千葉県館山市在住。エコミュージアムまちづくりを目ざし、2004年NPO法人設立。同年館山市総合計画審議委員。2008年青木繁「海の幸」誕生の家と記念碑を保存する会発足。2017年安房高等女学校木造校舎を愛する会発足。2024年館山市文化財保存活用地域計画作成協議会委員。

1. 授業づくりから地域づくりへ

千葉県館山市で戦跡調査を始めたのは1989年、高校教諭の愛沢伸雄（NPO代表）が社会科教員研修で婦人保護施設「かにた婦人の村」を訪問したことが契機となった。ここは売春防止法に基づいて、1965年に開かれたが、旧海軍砲台跡の払下げ地であったため、敷地内には本土決戦の抵抗拠点「128高地」の戦闘指揮所地下壕が現存している。

また、施設内の丘上には「噫従軍慰安婦」と刻まれた石碑がある。日本人唯一の証言者となった「城田すず子」の告白を受けて、施設長の深津文雄牧師が1985年に建てたものである。

愛沢は、これらを地域教材とする授業実践に取り組んだ。さらに市民に呼びかけて、1993年の「学徒出陣50周年」、1995年の「戦後50年」には展示・講演・証言の会などを開いた。1997年に戦争遺跡保存全国ネットワークが結成され、情報交換しながら調査研究を深めた。やがて公民館講座から「戦跡調査保存サークル」が生まれた。

花と海の観光地に戦争のイメージは相応しくないと世論もあったが、近隣市町村の教育委員会にも働きかけた結果、2001年に富浦町（現南房総市）が県営公園内に点在する大房岬要塞群を県内初の町指定史跡とした。

次いで翌年、館山市が「戦争遺跡保存活用方策に関する調査研究」に取り組んだ。悉皆調査により市内に47の戦跡が確認され、Aランク18（近代史を理解するうえで欠くことができない史跡）、Bランク13（特に重要な遺跡）と高い評価が多い。

そこで戦跡を都市計画に位置づけ、「地域まるとオープンエアーミュージアム館山歴史公園都市」

を目標像と定めた。なかでも、戦後の払下げで市有地になっていた「館山海軍航空隊赤山地下壕跡」を平和学習拠点として整備し、2004年より一般公開を始め、翌年には市指定史跡とした。

同時期、館山では、『南総里見八犬伝』の舞台である稲村城跡が、市道計画により破壊寸前となった。城郭や文化財の専門家らと連携しながら、1996年に「里見氏稲村城跡を保存する会」を発足。講演・展示会や城跡めぐり・古道ウォークなどを重ね、1万筆以上の署名を集めた。2000年に市道計画は凍結、その後迂回計画へ変更され、2012年に稲村城跡は南房総市の岡本城跡とともに国指定史跡となった。

房総半島南部の安房地域には、城跡群と戦跡群が重層的に重なる。市民の保存運動による史跡化実現は全国的に注目された。

2004年に設立したNPO法人安房文化遺産フォーラムは、教育支援やまちづくりを目的とし、全国から約300名の会員に支えられている。その理念は横軸にエコミュージアム、縦軸に「平和の文化」を柱と掲げ、ガイド事業を中心に多様な活動を展開している。

2. エコミュージアム「館山まると博物館」

南北逆さに地図を見ると、館山は、弧を描く日本列島の頂点に位置していることがわかる。太平洋に突き出て、東京湾の入口にあたるため、古くから海路を通じて海洋世界の人びとと交流し、共生してきた地である。その地の利は支配権力にとっての要衝でもあり、中世には水軍をもつ里見氏が170年にわたり安房国を治め、明治期以降は

東京湾要塞の重要拠点となった。

また、3つのプレートの影響を受ける館山は、隆起速度が国内最速といわれる。赤山地下壕内では鮮やかな地層や断層が見られ、河岸段丘に造られた掩体壕は上空の敵機から見つかりにくい。平和学習だけでなく、地球の成り立ちなども戦跡から学ぶことができる。

こうして多彩で魅力的な自然・歴史文化遺産を「館山まるごと博物館」と呼び、市民が学芸員となってガイド・調査研究・保全整備など様々な活動をおこなっている。これは、1970年代のフランスから提唱されたエコミュージアムという概念に基づくまちづくり手法である。

赤山地下壕跡が公開された2004年と、戦後70年にあたる2015年に、戦争遺跡保存全国シンポジウム館山大会を2度開催している。地域報告で紹介された館山市のマスタープラン「地域まるごとオープンエアミュージアム館山歴史公園都市」構想は、NPOの「館山まるごと博物館」活動とともに高く評価された。



オンラインパンフレット▶
「館山まるごと博物館」



3. 「平和の文化」を学ぶピースツーリズム

21世紀を迎えるにあたり、ユネスコの提唱を受けて国連は2000年を「平和の文化国際年」と宣言し、2001~2010年を「世界の子どものための平和の文化と非暴力国際10年」と定めた。「平和の文化 Culture of Peace」とは、対立が起きたとき、あらゆる生命を傷つけることなく、暴力によらず対話によって解決していこうとする価値観や行動様式と定義される。

しかし2001年9月11日、アメリカ同時多発テロ事件を機に、「平和の文化」は風前の灯火となった。2004年に、元ユネスコ平和の文化局長のD. アダムス氏が来日し、「平和の文化」を社会に実現

するために「ピースツーリズム」という平和産業の創出が急務であると訴求した。単に戦跡めぐりや一元的な平和学習にとどまらず、平和を探求する旅だという。奇しくも同年、NPO法人を立ち上げた私たちはこの理念に賛同し、活動の柱とした。

安房地域には戦跡だけではなく、「平和の文化」を学べる文化遺産が多い。たとえば、関東大震災後に各地で朝鮮人虐殺事件が多発した際、安房郡長は流言飛語を打ち消して、「朝鮮人を怖れるのは房州人の恥である、朝鮮人を保護せよ」と指示し、忌まわしい事件はひとつも起きなかったと記録されている。

また、館山の大巖院には、古いハンゲルを刻んだ1624年建立の「四面石塔」がある。秀吉の朝鮮侵略から33年目に、戦没者供養と日朝友好を祈願したものと推察される。400年記念にあたる今秋は、平和祈念シンポジウムを計画している。



ほかにも清国船遭難救助の「日中友好」の碑や、移民の交流・共生など、「館山まるごと博物館」では多面的に「平和の文化」を学ぶことができる。

スタディツアーガイド概要▶



4. 広域エコミュージアムの連携

房総半島と三浦半島は古くからつながりが深く、類似した自然や歴史文化を共有している。特に近現代では東京湾要塞地帯として、ともに重要な戦跡が点在する。私たちは横須賀市のNPO法人アクションおっぱまと連携し、2013年にシンポジウム「東京湾まるごと博物館」を共催した。

また20年近く、移民に関して日米や日韓の歴史学者との共同調査や市民交流を続けている。一つは、明治期に房総から米国カリフォルニア州モ

ントレー湾域に渡り活躍したアワビ漁師らである。お互いの地には、アワビ・クジラ・地震・戦争という歴史的キーワードを共有しており、これらを通して、自らの地域への理解をより深めることが可能となる。もう一つは、戦前に韓国済州島から房総に出稼ぎにきた海女たちである。どちらも、それぞれの地で共生し交流を育みながら、戦争に巻き込まれていく。こうした歴史をお互いの地から見つめ直し、情報共有していくことが広域エコミュージアムとしての発展につながる。

一方、韓国京畿道（キョンギド）では「京畿湾エコミュージアム」を施策としている。韓国の研究機関や市民団体が「館山まるごと博物館」の視察に来日したり、私たちが訪韓してエコミュージアム研究会を協働している。特に米軍爆撃訓練地であった梅香里（メヒャンリ）では、戦跡の保存活用とともに破壊された自然環境の再生を図り、とても興味深いエコミュージアム活動を展開している。

韓国 OBS テレビが2017年に制作したドキュメンタリー番組『屋根のない博物館ーエコミュージアム』では、日本の先駆的な事例として館山の戦跡ガイドが紹介された。



5. 平和学習プログラム

館山の平和学習は、加害と被害の両面から戦争を俯瞰することができる。しかし、沖縄・広島・長崎・松代とは異なり、その歴史背景は知られていないので、現地見学だけでは理解が難しい。

そこで平和学習プログラムは、10人以上の団体を対象とし、約1時間の座学をテキスト付きで提供している。見学は20人程度のグループ毎にガイドがつき、参加費は一人あたり2,000円である。

座学では、真珠湾と館山湾、沖縄県と千葉県、米軍の本土侵攻計画「コロネット作戦」と大本營の本土決戦防衛計画などの地図をそれぞれ比較しながら、世界戦略上に位置づけられた館山の役割を地政学的に紹介している。

見学コースは戦跡ばかりでなく、歩いて渡れる無人島の環境学習や文化財木造校舎の見学、海岸

段丘や200万年前の海底地滑り地層などを組み合わせることもできる。



赤山地下壕のガイド風景

6. 赤山地下壕の謎

関東大震災で館山湾沿いは住宅が98%壊滅し、2つの離れ小島までの海は干潟になった。3年後から埋め立てて、1930年に全国で5番目の館山海軍航空隊が開かれた。狭い基地は通称「陸の空母」と呼ばれ、中型攻撃機や艦上攻撃機などのパイロットや、落下傘部隊を養成する実用訓練がおこなわれた。これが渡洋爆撃、真珠湾攻撃、南洋諸島の攻撃などに投入されていったと考えられる。

航空隊に付随する赤山地下壕は、標高60mの小山に、網の目状に2km近く掘られている。そのうち約250mが整備され、公開されている。

建設時期については、ほとんど資料がなく不明であるが、市教委とNPOでは見解が異なる。文化財看板には「終戦が差し迫った1944年より後に建設されたのではないかと」解説されているが、昭和一桁生まれの周辺住民は「日米開戦前から掘り始めていた」と証言している。

壕内部は、凝灰岩質砂岩の大部分が素掘りであり、鮮やかな地層に、均等な力加減で掘られたツルハシ痕がくっきりと残っている。しかし発電室など重要部のコンクリート壁は、崩落防止策として、岩盤との間に金網を挟んで空気層を保持している。こうした構造からも、戦争末期の突貫工事とは考えにくい。震災後の地質調査をしたうえで、掘りやすく崩れにくい場所を選定し、かなり早い段階から専門部隊によって秘密裏に掘られたモデル的な地下壕ではないかと推察される。

さらに、戦後40年にわたりキノコ研究者が住みついてきたため、よい状態で保存されたといえ

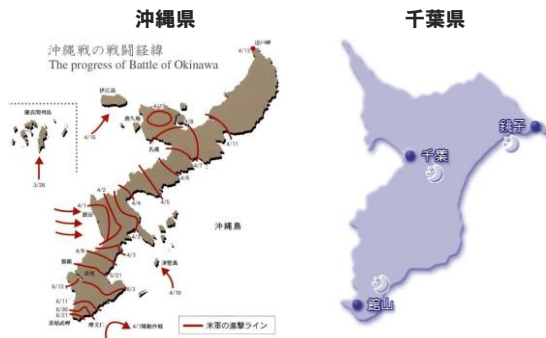
る。彼は晩年に、元「731 部隊兵」であったことを告白していたが、一般公開の直前に亡くなり、詳細は明らかになっていない。

7. 本土決戦体制と『沖縄作戦ノ教訓』

アメリカの日本本土侵攻計画「コロネット作戦」では、関東一円をターゲットとし、その中心は館山を指している。本土決戦に備え、房総南部には7万の兵が送り込まれた。

1945年6月29日、大本営陸軍部は『沖縄作戦ノ教訓』という極秘資料を作成し、水際作戦などを丁寧に記載している。沖縄県と千葉県を同じ縮尺倍率で並べてみると、南北の距離がほぼ同じだと分かる。まさに、教訓は本土決戦体制に生かされ、陣地や偽陣地、陸海空の特攻基地、蛸壺などが次々と作られたのである。

食糧供給のため、農民には花作り禁止令が出され、種苗の焼却が命じられた。海女たちは、火薬の原料となる海藻採取が命じられた。子どもたちは、発光物質を有するウミホタル採集が命じられた。安房高等女学校では、ひめゆり学徒隊と同様に、看護教育がおこなわれていた。



8. 幻の三布告から本土唯一の直接軍政

GHQ は、戦艦ミズーリ号での降伏文書調印式の翌日に、①日本語禁止 ②日本円禁止 ③反抗者は処罰という3条件を日本全土に布告しようとしていた。外務省はこれを阻止して、朝6時に保留とし、重光葵外相がマッカーサーとの直談判により、正午にその中止を取り付けた。

しかしその間、1945年9月3日AM9時20分に、総括指揮官カニンガム准将率いる米占領軍3,500人が館山に上陸し、本土唯一「4日間」の直接軍政を敷いている。歴史から忘れ去られていた

が、『米國軍ニヨル館山湾地区ノ占領』と題された資料の発見により、明らかになった。日本の占領政策を考えるための試金石だった可能性が高い。

赤山地下壕内には「USA」の朱文字が残されている。近年、米国テキサス軍事博物館から入手した資料のなかに、館山に上陸した司令官の報告書があり、「完全な地下海軍航空司令所が館山海軍航空基地で発見され、そこには完全な信号、電源、ほかの様々な装備が含まれていた」と記されている。赤山地下壕が、航空隊の管制機能をもつ航空要塞的な地下施設であったことが示唆される。



9. 戦跡保存の課題

2023年8月、赤山地下壕は、金網の入っていない部分のコンクリート壁が一部剥落した。修復と安全点検のために、今なお休壕が続いている。

一方、1944年12月竣工の「128高地」地下壕は、コンクリートの崩落や劣化がかなり進んでいる。自治体によって点検管理・保全がおこなわれる赤山地下壕と異なり、民有地にあるため、保存管理に関しては困難を窮めている。

また、戦時下に相当数あった掩体壕は、戦闘機用1基、爆撃機用1基が現存する。後者は状況が悪く全く立ち入れない状況にある。前者は、地権者の厚意によって見学可能であるが、千葉県茂原市のように自治体が借り上げて管理し、固定資産税の減免などの優遇措置が求められる。また、国登録文化財などの史跡化も急務と思われる。

2019年の文化財保護法改正に伴い、文化庁では自治体ごとに定める「文化財保存活用地域計画」を推進している。将来像や取組方針を定め、関係団体や市民の理解・協力を得て、よりよい地域社会をみざそうというものである。

館山市では今年度、ようやく作成協議会が立ち上げられることとなった。こうした話し合いを通じて、様々な課題解決に向かうことを期待する。